
第六天魔王の真実

狂王ライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第六天魔王の真実

【Nコード】

N8026M

【作者名】

狂王ライ

【あらすじ】

前世では最強の剣術といわれるほど名高い犬神流本家の元に生まれました。

しかし、後継者決定の際、兄に闇討ちされて殺害される。

そんな彼は大天使と出会い、新たな異世界。未知の世界へと飛ばされることになった。

時は戦国時代。彼はこの世界でどう生きていくのだろうか……。

恋姫にヒントを得て書き始めます。キャラの性格、武器などもバサラや

戦国ゲームにヒントを得て書きます。時々、アンケートをとるので参加してくださるとありがたいです。オリジナルなのでうまくないと思いますが、
よろしく願います。

はじめに……。 (前書き)

ジャンルはよく分からなかったのでファンタジーにしておきました。オリジナルで、歴史との矛盾も発生しますが、そこはご容赦ください。

はじめに……。

……とりあえず、ここどこだ？

おかしい……。確かに犬神流剣術後継者に選ばれ、それを妬む兄に殺されたはずなのに。

「私がお前を呼んだのだ。……誰ですか？

「大天使ライエルだ。」

これまたおかしいなあ、大天使の名前にそんな人はいなかったはず。

「所詮は人間の決めたことだ。ガブリエルなどという大天使はいない。」

そうなんだ……。教皇あたりが聞いたら驚くだろうなあ。

「話が脱線したので元に戻すぞ。お前は確かに一度死んだ。兄にな。」

やっぱり死んでますよね。もっと生きていたかったなあ。好きな子とも婚約できたのに。

「だから、そんなかわいそうなお前にもう一度生を与えようと思っただけな。」

そうなんですか？

「すまん、うそついた。実はな、新しい異世界が出来て……。そこまで手が回らないのだ。」

なるほど、日々多忙な生活を送っているということですね。

「ああ。無能な神様に日々悩まされて生きている。上が大変だと大変ですよね……。」

「ゴホン！また話が脱線したな。どうやら新しい異世界は主らの歴史の世界の話のようだな。年代は戦国時代といったところだ。」
それまた厳しい世界に生まれ変わるんですね。速攻死にそうです。

「なに。安心せい。そうならぬように身体強化をしてやる。日本など沈められるほどのな。」
それだけあれば僕には十分ですね。犬神流という剣術も覚えていきますし。

「刀もやろう。危険すぎて人間には持たせることが出来ぬ品物なのだが、お前なら問題ない。」
ほっ！神様のかごやらがっているんですね。

「勘だ……。」「さいですか……。」

「まあ、どこの家に生まれるかは分からんが、生まれた家によって立ち居地が変わってくる。」
そうですね。織田信長の元では生まれたくありませんね。

「第六天魔王などといわれているが、あんなものが魔王だったら地獄は魔王であふれかえるわ。」
へ、へえ〜。そうなんですか……。」

「ふむ……。少し話しすぎたな。時間が無いようだ。」
たしかに、体が消えかかっていますからね。

「よし、では始めるぞ……。大天使ライエルの名において！この者に新たな生を！！」

……完全に意識が落ちた次には見慣れない天井が待っていた。

はじめに……。 (後書き)

いかがですか？

まだまだ序盤なのでよく分からないかもしれませんが。

少し、満足して書いたつもりです。

これからもどうぞよろしくおねがいします。

二十七日から入院するのでしばらくは更新できません。

真実その一 「き、緊張しすぎちゃったんです！！！！」（前書き）

え〜と、退院いたしましたして、ようやく活動が再開できます。

まだ見ていない方もいらっしやると思うのでこれから人が集まってくればいいな

と、思っています。

よろしく願います。

歴史との相違点？あったほうが楽しいじゃないですか。

一応、歴史に乗っ取っていくので。ただ、主人公は未来を知っているっていただけなんです。

「真実その一」「き、緊張しすぎちゃったんです！！！！」

「おぎゃああああ！！！」

あ、どこかで赤ん坊が泣いている。それにやはり言うべきだな。知らない天井だ。

あれ？視界がなんだか狭いなあ。え？ちょ！体が浮いてる！

「信秀様！元気な男の子が生まれました！」「おお！そうか！早速、名前を付けねばな……………」

ああ、そうか。だから赤ん坊が泣いていたのか……………。その赤ん坊はどこに？っていうか体が浮いたままなんですけど……………。あ、目の前に知らないおじさんが……………」

「これこれ、あまりジタバタするでない。誠に元気だなあ。よし！お前の名は吉法師だ！」

「おぎゃ！きゃつきゃ！」

も、もしかして、俺が赤ん坊で？！たった今名づけられたのも俺！？し、しかも吉法師って……………。

頭に思い浮かぶのは様々なゲームで悪役ぶりを発揮する信長……………。ワフタ……………。

（ちなみに吉法師とは信長の幼名である。）

「む？急におとなしくなったなあ。腹でもすいておるのかのう……………。おい、乳母を呼べ。」

え？ま、まさかあ！うわあ！目の前に女性の象徴が！の、飲まなきゃいけないんですか！？？

「はい、お乳をちゃんと飲んでくださいね。」

なんとということだ……………。精神年齢二十五歳にして女性の乳を飲まなければならぬなんて……………。

な、なんか緊張してきた。で、では……………。

「イヤアアアア！」あ、口の中に鉄の味が。

「おお！なんとということだ！こやつ、噛み切りおったぞ！！！」

あう……、すみません！わざとじゃないんです！本当なんです！
少し緊張しただけなんですよ！

その後も数人くらい噛み切ってしまいました。本当にすみません。
真実その一、織田信長が乳母の乳房を噛み切ったというのは緊張の
し過ぎが原因だった。

その後、たった二年で城主になった……。本当にいいんだろうか。
二歳で城主って……。

真実その一 「き、緊張しすぎちゃったんです!?!」 (後書き)

あ!すみません!

なんだか短くなっちゃってしまいました。次回からは気をつけますのでよろしくお願ひします。今度はこの世界について語るうと思ひます。

竹千代なるものと魔王の出会い（前書き）

中々、オリジナルということもあり更新が難しいです。
そんな私ですがよろしくお願いします。

竹千代なるものと魔王の出会い

竹林の中で銀髪の少年はたたずんでいる。風により葉が揺れ、心地よい音が響く。やがて葉が歌うのをやめるとゆっくりと目を開き、周りの竹を一閃する。刀をカチンと鳴らして鞘に収める。そうしてから竹が切れるのはお決まりのことである。だが、竹は一向に倒れない。これが犬神流剣術の特徴。

鋭き爪で魂を切り刻み。猛々しい牙で生気を食らう。

相手の体を傷つけるのではなく、魂、精神を切り離し、相手を殺す。

兄はものすごいサドで相手を傷つけることに執着したために、当主選ばれなかった。

「次は、犬神流禁忌三十八番……。」「吉法師様！」「絶！」「え？うわあ！」

あれ、今人の声がした気が……

「何をするんですか！危ないじゃないですか！ただでさえ貴方の剣術は恐ろしいのに！ガミガミ……」

涙目をしながら必死に説教をする家臣A

「ごめんごめん、何か用があつてきたんじゃないの？」「は？……ああ、そうでした。実は……。」「

「？松平の嫡子が？」「ハッ！なんでも、叔父の裏切りによるもの。」

「ふーん。まあ、会ってみたいことには変わらないね。部屋に案内しといて。」

あ、そういえば言っただけ。あれから四年がたっているんだよね。それで考えたんだ。

大天使の人はここは異世界だといった。すべてが歴史どおりに進むわけではない。だったら、第六点魔王なんて呼ばれないような生活をしていけばいいと。だから、家臣や女中にもソフトにフランクに接しているんだよ？おっと、話が長くなってしまった。

「吉法師さま、おあがり〜！！」「ああ、もう！それ恥ずかしいからやめてっていったじゃん！」

「で、ですが！」「あ、もういいや。次から気をつけて。さて、松平の嫡子は……。」

あれかな？顔を伏せている栗毛の前髪が長い子。

「え〜っと、君が……。」「た、竹千代と申しませう。」「じゃ、じゃあ顔を上げてよ。」

噛んだ！今噛んだよこの子！顔が髪の毛で隠れちゃってよく見えないや。

「僕は吉法師。よろしく。さてと、堅苦しいのはこのままでいい一緒に遊ぼうか！」

「え？え？」「ほらほら早く早く。お日様は沈むのを待ってこないよ。」

「は、ハイ！キヤア！」「へ？」

な、何も無いところで転んだ！これぞドジっ子パワーだな……。

「い、いらいれす。」「だ、大丈夫？おでこを打っちゃった見ただね。……誰か！冷やすもの持ってきて！」「御衣！」

家臣Bが持つてきた水でぬらした手ぬぐいを受け取り、額に当てる。そのとき、前髪をよけたためか、彼女の顔があらわになる。

「へー、結構可愛い顔してるんだね？」「ノノノじ、自分でやりますから！」

あ、ちょっと失礼なことだったかな？顔を真っ赤にして怒らせてしまった。

「大丈夫？」「は、はい、何とか……。」「よかった、可愛い顔が傷ついたらどうしようと思っちゃった。」

「ん〜、屋敷でおとなしく遊んでいようか、札遊びとか良いね。」
「……すみません。」

「謝ることは無いよ。」「でも、私のせいだ。」「もつこの話おしまい！それよりも遊ぼう！」

「で、でも。」「でもはもついいの。ほら早く……」「ノノノハイ！」

それからはカルタなどで遊んだんだけど、強い何の！全戦全敗！まあ、いつか！彼女の笑顔も見れたし！……そして夜。

「すうー、すうー……」「あらら、眠っちゃった。」「肩に寄りかかりながら静かに寝息を立てている。

「しょうがない。運びますか。」「

彼女を客間まで運んだ後に布団を敷き、そこに寝かせる。離れようとしたんだけど。

「困ったなあ。袖をつかまれているには動けないよ。」「

一回、本気で離れてみるか。だが、そのもくろみもすぐに無駄となった。

「……行かないで、お母様……。」「^^;」「

僕は男なんだけど……。確か、家臣の話では母はすでに生き別れてしまっているとか。

女の子の涙なんて見せられた日には断ることが出来ない。しかたない、ここで寝るか……。

竹千代 side

第一印象は、ちょっと怖い人。家臣に怒っているんだから。でも、そんな印象は一気に吹き飛んだ。

「え〜っと、君が……。」「た、竹千代でございませゆ。」「

噛んじゃった！もうダメだ。絶対に怒られる。

「じゃ、じゃあ、顔を上げてよ。」

ああ、きつと顔を上げたらぶたれるんだ。いやだよ。

「僕は吉法師。よろしく。さてと、堅苦しいのはここまでにして遊ぼうか！」「え？え？」

怒っていないことに安堵はしたけど、初対面でいきなり遊ぶなんてうまく返事できなかったな。

「ほらほら早く早く！お日様は沈むのを待つてはくれないよ？」

「は、ハイ！キヤア！」

痛いよ。なんで転んじゃうの？昔から何も無いところで転んばかり。

「い、いらいれす。」おまけにまた噛んでしまった。今度こそ怒られる。

「だ、大丈夫？おでこを打っちゃったみたいだね。誰か！冷やすもの持ってきて！」「御衣！」

あ、心配してくれた。こんな人、今までいなかった。ひんやりとした手ぬぐいをおでこに当ててくれる。顔をあまり合わせなかったからよくわかんなかったけど……。カッコいい……。

「へー、結構可愛い顔してるんだね。」「ノノノじ、自分でやりますから！」

可愛い？私って、可愛いのかな？同い年の子には鈍くさいとか、のろまとか言われて馬鹿にされて、いつも内気になって、髪も伸ばして顔が見えないようにして……。目を付けられないようにして……。

「大丈夫？」「は、はい、何とか。」「よかった、可愛い顔が傷ついたらどうしようと思っちゃった。」

また、可愛いって言ってくれた。

「ん〜、屋敷でおとなしく遊んでよっか。」「……す、すみません。」

きっと私がドジだから……。迷惑かけちゃったから……。

「気にしないで良いよ。」「でも、私のせいで。」「もうこの話おしまい！それよりも遊ばー！」

「で、でも……。」「でもはもういいの！ほら、早くー！（二口）」「ノノハイ！」

笑顔も見せてくれた。とてもまぶしかったなあ……。私もこんな笑顔が出来るようになったら良いのに。

それから、カルタとかをやりました。私、こういうのが得意なんです！吉法師さんも負け続けで、勝ち逃げは許さない！もう一回だ〜！というので、何回もやっているうちに夜になってしまいました。

遊ぶのをやめて月を眺めていると……。眠気が……。

夢の中で、彼が笑っています。まぶしい笑顔です。でも、だんだん離れていって。その姿がお母様に似ていて……。

「行かないで！お母様！！！」

一人でないと、やさしいぬくもりを持った手が……。

「ん……、ここは……。」

布団の中。どうやら眠ってしまったようです。でも、なんだか、手があったかい。

横を見ると座ったまま眠っている吉法師様が手を握ったまま眠っていました。ずっと、そばにいてくれたようです。……そのせいか体が少し冷えているようです。

「私のために……。」「すう、すう。……へクチ！」

やはり、寒いのでしょうか、くしゃみをしてしまいました。……。ふ、布団の中に入れてしまいましたでしょうか？／＼／＼、別に、いやらしいことを考えているわけではなく、風でも惹かれてはいけないと思っただけです。

「起こさないように……そっつとそっつと。」

体を横に倒してから、困ったことがある。どうやって布団の上に乗せようか……。なんて考えていると、あっちのほうから、布団の中に入ってきた。

「／＼／＼さ、さすがに少し、緊張します。」

あつちからしたらそんなことはお構いなし。こっちに近づいてきて腕を背中に回して抱き寄せられる。か、顔が近いです！……！息が、前髪にかかっています！

その日の夜は疲れが出てきて眠るまでただただ顔をつつむせて目を閉じるしかありませんでした。

これが後に魔王と呼ばれる人との出会いでした。

FIN

竹千代なるものと魔王の出会い（後書き）

ん、中々悪い主人公ですね。天然ウーマンキラーですねW
でも作者はこういうのが好きなのでこれを続けて生きたいと思っています。
います。

前回よりかは読み応えがあるかと……。

まだまだ始まったばかり、どうかよろしく願います!!!

あれから二年……。」「早い！！！」（前書き）

さて、二年後の話になる予定です。

「早くない？」

すべては神《作者》の意思なのです。

「PC禁止されてしばらく出来なかったからでは??？」

……すべては神《作者》の意思なのです。

「凶星ですね、分かります。」

； ；許してください。

「はい、では久々の更新です。どうぞ。」

……………どうぞ。

あれから二年……。」「早い！！！！！」

……なんか随分と懐かしい夢を見たな。あれは確か竹ちゃん（親しくなつてからアダ名を使うようになった。）とであった日のことだっけ。

襖を静かに開けて朝日を浴びる。あれは二年前。一人の少女がこの城にやってきた頃の話。あの夜の後にはなにかと騒がしかった……。理由は察してください。

「ん〜、ハア。とりあえず、顔でも洗おうか。」

なんて呟いてみると慌てた様子の家臣が走ってきた。

「ハアハア、大変です！松平の頭首が病死しました。」

「それは本当？」「ハイ、直々に使いのものがやってきて……。」

直々に使いのものが？それではやはり……。

使いのものと教育係の人、それと竹ちゃんこと竹千代。

それぞれが広い部屋に座っている。もちろん、城主である僕は正面、竹ちゃんと教育係の人は横に控えている。使いの人は頭を下げている。

「表をあげよ。」「ハッ！」

それなりに年を重ねた中年の家臣であろうか？その人がしゃべり始めた。

「この度は……」「そういうのは置いといて、用件は？」え？は、ハッ！前松平頭首様が病に伏せ、そのまま言っしまいましたのはお聞きいたしましたでしょうか？」

竹ちゃんには言っただけだったのでそんな……とつぶやき驚きの顔を隠せないようだ。

「ええ、真に遺憾です。」

形ばかりの挨拶を教育係……面倒くさいな。平手政秀がする。

「そして次の頭首をめぐって争いを続けております。ですので……」

「ここに居る竹千代殿を次の頭首にしたいと?」「一応はそれ
まとまっております。」

「やはり……。」「あの、私のほかに候補は?」

二年間音信不通であつた松平に新たな子はいないのかとたずねる
と、

「いえ、竹千代様以外には……。」

だからこそ荒れるのだらう。他に候補がないのなら私が私ごと
次々に出てきた所に一人だけ心当たりがあると云つたのが目の前に
いる人なのだとか……。

「僕に決める権利はありません。彼女の人生です。彼女が決める
しかありません。」

「わ、私は……。」「竹千代様、どうかお願いします。」

「先ほども言つたとおり僕に決める権利はない。……だけど、僕
は賛成だね。君には才能がある。人を寄せ付ける人徳。そういつた
ものが君にはある。」

実際に街に出たとき瞬く間に味方を作つていったのだから間違
ない。乗っ取られるのではないかと家臣たちがささやくほどだ。そ
んな噂は速攻で封じたけど。

「それに君が目指したいものは平和だらう?ならばその平和に一
番早く取り掛かることの出来る立場は……。大名だよ。」

「少し、考えさせてください。」「……分かりました、では私は明日も来ますゆえ。」

そういつて立ち去ろうとした中年家臣に声をかけた。

「今日は泊まっていくといい。平出さん、案内頼めるかな？」
「分かりました。」

「ですが……。」「僕の城には人一人泊める余裕すらないと？」
「い、いえ！そんなこと！！！」

機嫌を損ねてしまったと後悔する家臣とは逆にまたからかいが始まったため息をつく政秀。

「冗談ですよ、ではまた何かあったらお申し付けください。」
「かたじけない。」

冷や汗を流しながら退室していく二人。この部屋に残ったのは二人。

「さて、と。あまり時間はないようだね。冷たいようだけど、早めに決めてしまったほうがいいよ？」

「頭首になるのはいいんです。でも……。」「そうだね、大人しく自分たちがつこうとしていた立場を素直に譲るって事は、弱気な女の子の君を自由に操れると踏んだからだね。」

一番気になっているところを突かれて少々暗くなっている。

「実際、君には足りないものが多い。主としての自覚も力も頭脳も……………」

「だけど、王としての力は備わっている。どんなに頭がよくても、どんなに力があっても、民からの信頼がなければならぬ。君にはその力がある。民から必要とされれば、あちらでも優位に立てるだろう。強くなれ、人との絆を大切にするんだ。それが君の力になる。いざって時は僕が君の力になるよ。」

次第に覚悟を決める顔つきになっていく竹ちゃん。もとい、松平家党首竹千代。いや、名前も変えるのかな？

「おっと、僕としたことが。まだ頭首になると決めてないのにね。じゃあごはんにでも……………」

「いえ、私は引き受けます！絶対に、この世を平和に見せませす！—」

まだ八歳になった女の子の言うことではないね……………。これで、—
応は歴史どおりに進むのかな？

「私は名前を改めます。松平家康。それが私の名前です。」

「では、家康殿。どうなさいますか？」「あの人をここへ呼び戻してください。」

「そういつと思って、実は言つとすぐそこにいるんだよね。」

襖がすつと開いて先ほどの家臣が涙ぐみながら立っていた。平手は苦笑していた。

「さて、出立するのなら今日がいいだろう。町の人達にも挨拶が出来る時間帯だし。」

それならば、と早速準備に取り掛かせた。

あれから二年……。」「早い！！！！」(後書き)

えゝ時間の都合によりここまでにさせていただきます。

更新のペースといい何もかも勝手ですみません。

これから更新のペースをあげていきたいと思しますのでよろしくお願ひします。

名前を修正させていただきました。徳川 松平。

旅立ちの日、裏切りの月 前編（前書き）

題名のとおり、今回は一波乱あります。

久々にシリアス????を書くのでご了承しておくれやす。

旅立ちの日、裏切りの月 前編

……というわけで前回の話とおり今日、彼女が旅立つわけですがどうやら不穏な動きがあるらしくって……。教育係の平手さんと相談中。

「では、ここまで行った所でこちらの道を……。」「ん、だつたらこつちからこつ……。」「

意見がまとまらない……。もう、最初からここからでよっか？

「そうですね、そうしましょう。」「え？いいのかな？」

よかつたらしい……。このままじゃ、意見もまとまらないし……。

「よし！家康ちゃんを呼んで。二人きりにしてくれないかな？」「分かりました。」

「という話だったんだけど……。」「不穏な動きですか？」「まあ、君が上に立たれたら困る人達だね。」

「私、大丈夫でしょうか……。」「まあ、やってればなんとかなるよ。なんくるないさー。」

そうそう、なんくるないなんくるない。

「さて、さっきの話の続きなんだけど。君たちにはここから出てもらいたいんだ。」

「え
.....
？」

旅立ちの日、裏切りの月 前編（後書き）

母にPCが殺されそうになったので分けてお送りします。

旅立ちの日、裏切りの月 後編（前書き）

裏切りの月がのぼるとき、偽りし者は荒ぶる風へと姿を変える。
前回の続きです。

旅立ちの日、裏切りの月 後編

出発は夜。なるべく誰にも悟られないように動く。

理由は、彼女の上に立たれたら困る人。つまりは、薄汚いことを考えている奴ら。奴らが刺客を送り込んできている可能性がある。そして、事前に兵に教えた出発口は嘘。少数精鋭。しかも、正しい出発口を教えた兵にもそれぞれ違う配置を教えている。

これで、正しい位置を知っているのは僕、竹千代、家臣、教育係平手政秀。計四人。

今日は青い月の夜。

一月に四回、この月が現れる。この日は妖魔や死霊の力が強くなる。故に出歩くものはいない。兵でさえ仮病を使って休むものがあるくらいだ。そのくらいこの夜は恐れられている。

遂に出発。

「では、予定通りに……。」「はい。」「平手は留守番よろしく。」
「承知いたしました。」

城を任せ複雑に絡み合う森の中を進んでいく。安全が確実に確認される場所までは僕がついていくことになった。分かれ道を右へ左へ真っ直ぐに、斜め後ろとか……。。

最後の分かれ道。そこに入っていく。

「やっぱり、君が間者だったんだ……。」「……やはり、油断しないほうがよかったですね。」

そこには、城にいるはずの平手政秀……によく似た人間。

「君は誰？平手さんじゃないね？」「そう、私は平手政秀じゃない。」「」

女の声？そう、思った瞬間暴風が辺りを覆った。一瞬、妖魔が起きたものだと思った。しかし、それは妖魔からではなく、彼女から出されたものだった。

背中には風の一文字。白の装束を身にまとい首につけたマフラーが彼女の風の強さを表すかのように激しくバタついている。

「……………風の文字……………。風魔党の忍びか……………」

この世界では相手の懐にもぐりこみ情報を収集し、報告する役目をになったものを間者と呼び、それに留まらず、暗殺、工作を行う間者の中でもエキスパートを忍びと呼ぶ。

そのエキスパートの中でもエキスパート。風魔党の一族。伝説の忍者集団。

「厄介な奴を送り込んできたな……………。これは手強そうだ。」「いつから気づいていた？」

「話し合いをしている頃さ。僕は面倒くさくなって適当にここを選んだ。本当ならこっちのほうがいいと、この辺に長くいる者なら分かることだ。だけど、君は賛成した。そういうこと。」「

「貴方を殺して、彼女を殺させてもらう。それが任務だから。」「

「なら、まずは僕を殺さないかね。」「ええ、覚悟して。」「覚悟ならこの世界に来た時からしてる。」

愛刀とまでは行かないが、刀を抜いた。相手も同じく、小振りの忍刀を両手に持つ。

地を足で蹴り、互いに素早く接近。一振り……。高い音を出してそのまま膠着。

「私と同じ速さなんて……。本当に油断ならない……。」「同じく……。」「

空いている左手で切り上げをしてくるのでバックステップで回避。そこを逃すまいと素早い攻撃を繰り出す彼女。切り上げ、切り下げ、突き、縦、横、横、切り上げ、縦。

バキィーン!!!!

今までとは違う音が響き、刀の破片が宙を舞う……。

「刀が……。」「終わり。」

いや、まだだね。そう、呟いた時、彼女の表情が変わる。片手には先ほどの刀の破片。それを使い、切り上げる。

予想外の攻撃に回避が送れ、顔を隠していたマスクが破け、風で飛んだ。

彼女の端整で冷たい表情に走る十字の傷。予想通り、片目はつぶれているようだ。左側からの斬撃を捉えきれずにマスクを破いたのだ。

「思ったより……。」「……。」「

無言で再び急接近。手に刀の刃が食い込む。追い討ちを掛けるような攻撃を受け止めたときに奔る痛み。滴り落ちる自らの血。血が抜けることで先ほどより頭が動く。第六感が叫ぶ、そこだと。

上。
「ツとと、右だよな?」「!?!」「次は左、上、上、下、右、下、

予想できる限りの攻撃を予想していく。そして、それを聞いてか

ら変える攻撃パターンすらも……。

「どつして……どつして!!?」「あせりは禁物。」

更に予想。最初の驚異的なスピードは無くなり、一撃一撃に力をこめて、無駄に隙を作っていく。すでに、受け止める必要の無い攻撃。紙一重でノラリクラリとよけていく。

「当たれ！当たれ当たれ!!」「力まない力まない。」

でも、心なしか一撃が重くなりすぎていないかな……？石、砕いちやったよ……。

「なんで、なんでええええええ!!!!!!」「え!?!ちよ、キヤラ崩壊……。」

気のせいかな？後ろから何か出てるんだけど……？あ、気のせいじゃないか……。

「憑き物使い!?!」「ウワアアアアアアアアアア!!!!!!!!

「!!」

えー、説明しよう。憑き物使いとは、この世に存在する妖魔、死霊。その中でも高位な存在がいる。

それは人に取り付くことで私服を肥やしたりする。よく「よいではないか、よいではないか。」とか言ってる人とかも実は憑いていたりする。

稀に、この死霊、妖魔を屈服させることの出来る人間がいる。憑き物は力を与える代わりに、ある感情を劇的に高ぶらせる。この子の場合は「怒り」と「不安」かな……？

その又、極稀にある感情を高ぶらせることも無く完全に屈服させることの出来る人間がいるらしい。

「ウルアアアア……!!」「うわ……!!」

早いし、強いし……!!こんな攻撃何回もよけてられないよ……!!。だけど、そろそろ……!!。

「ウグ!?」「やっと、終わった……!!」

ただのらりくらりしてた訳ではないんですよ？あらかじめ、封を作っておいたんです。

初歩中の初歩。まあ、陰陽師でもなければ、邪術氏でもありませんから……。

「ちょっと、血を出しすぎたかな……？」「ルアアアア！！！！ウワアア！！！」

もがく彼女。いくら、もがいても、術の起点となる場所を見つけないと意味が無いからね。だから、あまり使われ無いんだけどね……。

「さて、体を彼女に返してもらおうか……。犬神流剣術禁忌一番『殺生』」

心臓の左心房と右心房を見極め突き刺す。まあ、血も出なければ傷も無い。血管を通る生気の流れを止める。そのまま殺すことも出来るし、生かすことも出来る。

「ウ……ルア……。」「5 / 4 / 3 / 2 / 1……。終わり。」

刀を抜く。

憑き物は眠りに落ち、彼女は気を失ったまま倒れた。

旅立ちの日、裏切りの月 後編（後書き）

え〜と家庭内の事情で遅くなってしまって申し訳ありません。

今回一気にキーとなる単語を大量に出しましたので、次回はそれをまとめたいです。

今までのまとめとまだやってない主人公紹介&キャラ紹介(前書き)

主人公の説明。キャラの紹介。先話で出た重要なキーを解説していきます。

今までのまとめとまだやってない主人公紹介&キャラ紹介

まず、主人公紹介

名前 まだ吉法師（前世では犬神光圀。ちなみに光圀は代々当主が授かる名前）

犬神流剣術当主。本家の次男。本家の者しか許されていない剣術・禁忌を使うことを許されている。

身体能力も強化してもらっている。戦術はまったりと相手を分析、相手の手を読む。

武器はまだ受け取っていないが、刀らしい……。とても人間には扱える武器ではないらしいが……。

キャラ紹介

名前 風魔の女

伝説の忍者一族風魔党の一人。松平の家臣に雇われた。

だが、憑き物による感情の高ぶりにより、冷静な判断が出来ず、敗れた。

顔に十字の傷。過去の負傷の跡らしい……。

名前 平手政秀

吉法師の教育係。現在行方不明。

名前 松平家康

幼名竹千代。叔父の裏切りによって織田家に運ばれてきた同い年の女の子。

家を継ぐために帰る途中。

もちろん、吉法師にほれている。

死霊・妖魔

死んだ後に残る強い思念によって残るのが死霊。物に取り付いたりする。

人を喰らい過ぎた結果、体に大きな変化が現れ、異形のものになった猛獣。

憑き物

妖魔、死霊の中でも高位な存在。これが人に取り付いた際、その人の意識を乗っ取り支配する。

悪名高いものには時々憑いていたりする。

憑き物使い。

憑き物を稀に支配できる存在。一般的には強い信念や、意思がある者が支配できるらしい。

憑き物から力を借りることが出来る。しかし、その副作用により感情の一部が劇的に高まる。

風魔の女の場合。「怒り」や「不安」

陰陽師

妖魔、死霊を消し去るスペシャリスト。俗に言うエクソシスト。陰陽術を用いて悪を滅す。

RPGでいう白魔法的存在。

邪術師

陰陽師とは逆に妖魔、死霊を呼び出して戦ったりする。俗に言う悪魔使い。邪術を用いて敵を滅す。
RPGでいう黒魔法的存在。

今までのまとめとまだやってない主人公紹介&キャラ紹介(後書き)

とりあえず、こんなものだった気がします。

感想、評価をお待ちしております!!!!!!

裏切りの忠誠（前書き）

久々の更新で申し訳ないです><
なにとぞこの作品をお願いします。

裏切りの忠誠

忍びside

この城の城主、吉法師は幼いながらも尾張一の剣豪としても名高い。そして、政にも才を発揮している。

そして、この城に忍び込んだ刺客は誰一人帰らない。先日も一人処分されたところ。

油断はならない。だが、心のどこかで油断していた。所詮、まだ八歳と……………。

教育係平手政秀に化け、遂に出発の日。ここに来た家臣というのも偽者。

万が一、私が失敗したときの保険だろう……………。

そして、やはり油断ならなかったようだ。こちらの策はばれていない。

噂どおりの剣豪。視界に外れるほうから攻撃してくる……。

そして……、感情が「不安」に駆られ、怒りが生まれてくる。

これで奴も終わりだ……。

「彼女に体を返してもらおうよ？」

意識を取り戻してきた……。戦闘が終わったということだろう。
これで奴も……。

「ハア!!!」 ザシュ!!!

そこに死んでいると思っていた人間が立っていた。しかもなにかと戦っていた。

「あれは……。妖魔?？」

風魔党の忍びは倒れたとき自動的に式札が起動し、そこから妖魔があふれ出てくる仕組みになっている。

だが、彼女はそのことを一切知らない。

「あ!起きた?ちょっと待ってて。これで最後!!!!!!」

人間の何倍もある相手の首を切り落とし、折れてしまった刀を捨てた。

そして、こちらへ一歩一歩、歩み寄ってくる。腕からは血が流れた後がある。すこし足取りがおぼつかない。

「おっとつと。ちょっと血を流しすぎたかな？」

陽気に敵の傍にある木に座った。なんて無防備なのだろう。

「驚いたよ。憑き物使いだったなんて。おかげで血が……。」

「なぜ、私を助けた？」「ん？特に理由は無いよ。しいて言えば……。君がとても可愛いからかな？」

彼の月に照らされた太陽のような笑顔は私をやさしく照らしてくれた。

「わ、私が……可愛い？顔に傷が入っていても……？」「可愛いことに変わりないと思うけど。」

傷が一本入ったくらいでどうして可愛くなくなるのかなあ、と続ける。

（彼の家の剣術の修行は厳しく、女性であろうと手加減はしない。それ故、顔に傷が入ることもあったのだが、彼女達は皆その傷に誇りを持っていた。by作者。）

「ねえ、君は僕に仕える気はないかな？」 「私が？殺そうとした相手を……？」

何を考えているか分からない。この数日間で分かったことなんて一度も無い。

いや、たった今分かったことがある。この人はとても恐ろしい人だと……。

「丁度、君みたいな人が欲しかったんだ。それに……平出さんの居場所も……。」

そういつた瞬間、顔に涙が流れる。彼はわかっているのだ。平手は既に私に殺されていることを。

「平手政秀は……。西の山の麓にいる……。」「グスツ……。ありがとう。」

ありがとう……？殺した相手にありがとう……？本当に読めない人だ……。

「あと、頼みがあるんだ。仕えるのはやだでも、これはお願いしたい。」

「何だ？」「彼女を……助けて欲しい。」

！？あの家臣のことも知っていたとは……。

「分かった。」「重ねて……ありがとう。」

そのまま、寝入ってしまった。ありがとうか……。案外、悪くないかもな……。

反対側の森……

「な、なにを……！？」「残念ですが、貴方には死んでもらいます。」

見つけた……。……！！！？この殺気は……！！！！！！

「だ、誰だ!!」「……………何をしている?」

真つ黒な髪、顔立ちと体型から女性だろう……………。しかし、身なりは粗末。その割には立派な槍のようなものを手に持っている。

「く!吉法師に読まれていたのか!」「……………そんな奴は知らない。」

そうだろう。彼は私に助けてやってくれといった。手はうつてないはず……………。

ん?じゃあ彼は最初から私を取り込むつもりで……………。恐ろしい人だ。本当に。

「だれであろうと、この場を見たものには死んでもらう!!!」

無駄だ……………。明らかに力の差がありすぎる!私より強い……………。彼と同等?いや……………。

ザン！！！

刀と共に一刀両断される相手。速い……見えなかった……。それにあの力……。

「そこにいる奴も出て来い……。」「私のことまで見破るとは……。安心しろ、私は味方だ。」「

「吉法師様に頼まれてやってきた。」「ホントに？」

と腰を抜かしていた家康。

「ああ……。ところで貴方は？」「本多忠勝。」「それでは本多殿。この方の護衛をお願いしたい。」「

「なぜ？お前がやればいい。」「生憎、吉法師様は戦いによつて疲れて倒れた。私は城まで運ばなければならぬ。だから、頼めな
いか？」「

「報酬は？」「そちらの方は松平の跡取り。それなりに……。」「

「た、倒れちゃったんですか！？大丈夫なんですか！？」「ええ、幸い。命に別状は……。」

「よかったあ……。あの、本多さん。」「……？」「私からもお願いで来ますか？護衛。」

「分かった。報酬は貰う。」「ありがとうございます！これからお願いします……！」

あれが、彼の一目おく存在か……。そろそろ行くか……。

「えっと、そちらの方……も？」

そこに私の姿はもう無かった。

s i d e o u t

「おゝい！おゝい！！」

いつか見た真つ白な空間。ここはたしか初めて天使にあったところ。

「こつちこつち！！」「……誰！？」「始めまして大天使リイエルと申します。」

「私、ライエルの弟をやらせていただいておりますっていう堅苦しい挨拶はここまで！！！」

「実は、兄さんに頼まれて。うんぬんかんぬん。」「ちゃんと説明して……。」

「ほら、なんか刀をあげるって言ったジャン！」「そ、そうだ

ね……。」

テンション高いな……。ライエルさんが忙しい理由って……。

「はいはい、余計な考え事しない！」

「話を戻すけど！刀ね！刀がね〜。ちょっと……。」

何を深刻そうな顔を……？

「盗まれちゃったの！第六天魔王に！でね！そいつが今貴方の世界に下りてるの！！」

「ということは……。刀を奪うしかないと……？」

「ん〜、貴方の世界の死霊や妖魔と同じだからうまくいけば……。」

「憑き物になって憑き物使いになれるかも……。と？」

まあ、善処します。「んじゃ！またね。」

「ハウ！……。」
「目が覚めましたか？」
「君は……。」
「……。」
「……。」

先ほどの忍び。そして、ここはおそらく城。運んでくれたのか……。

「君がここまで運んでくれたということは……。」「ええ、貴方に仕えましょう。」

よかった……。いくら歴史の流れを知っているとはいえ、イレギユラーがあっては困る。

忍びを使って各大名の情報を集めるといふのは重要なことだ。

「そうか、よかった。頼りにしているよ……。」

「御衣」

裏切りの忠誠（後書き）

えっと無理やりな終わらせ方ですみません！

とりあえず久しぶりの更新だったので許してください！

忍びが仲間になり、教育係が死んでしまいました。

次回、第六天魔王降臨？ですw

関西弁キャラ登場……。 (前書き)

長らく更新できずにすみません。家の事情なので少しずつ更新していきたいです。

関西弁キャラ登場……。

翌日の朝、西の山の麓に平手政秀の死体が発見された……。

「グスツ……、平手さん……。貴方から教わったこと僕は忘れません……。」

はずだった……。

「勝手に人を殺さないでください!!」

なんと、平手さんは生きていたのだ……。

「しかし、一体どうやって？あの傷では……。」「そんなにひどかったの？」

「ええ、傷がいたるところに。ですが……。こいつのおかげで助かりました。」

背後に映る憑き物……。それは特定の形を留めておらず、ぼんやりと映っていただけであった。

「あれ？憑き物使いだっただの？」「ええ、話していませんでした

っけ？」

聞いてないよ……。

「こいつは傷を癒す力があるんです。まあ、それでも限度はあるんですが……。」

「最終的にはあそこにいる子に助けてもらったと……。」

少し離れたところにいる少女。

「はい。名前を羽柴秀吉というそうです。」

後に天下を手にする豊臣秀吉に助けてもらったとは……。そういえば元は農民だったっけ。

「そう……。御礼をしなくてはいけませんね……。」

「ところでそちらの忍びさんは……？」「ん？昨日キミに襲い掛かったりあの子を暗殺しようとした忍びだけど……。」

「うええ！！危ないですよ！近づけないでください！死にます死にます！今すぐ死にます！！！」

「ただけ恐怖心と警戒心を抱いてるんだ……………」。

「はいはい、落ち着いて落ち着いて。」「うむ、主の言つとおりだ。少し落ち着け。」

「ポンと手を置いただけなのに……………」

「ギヤアアアア！！……………ガク。」

「倒れちゃったよ……………」。

「はあ、しょうがないな……………。そのの兵士さん。城まで運んであげて……………」。

「担がれて運ばれている平手さんを見送った後。」

「とじろで、まっつ……………。」「吉法師という名前では呼びにくいと思つて……………」。

「名前といえば君の名前は……?」「無い……。名前は捨ててしまった。」

「そう……。じゃあ、名前をつけないと……。よびやすく、風でいいかな?」

「主がそういっならば風と名乗ろう。」

後は……。あの子にお礼をしないとね……。

「君が、秀吉さんかな?」「ええ、そうですけど……?」

秀吉 side

「何かお礼をさせてもらえないかな?」「お礼……。なんのです?」

なんだろう、同い年にしか見えないのにすごく落ち着いてて、気に満ち溢れてて、それに……。

(かっこいいい……。)

「どうかした?」「い、いいえ……。」

「お礼って言うのは、彼を助けてくれたお礼だよ。」「じゃあ、貴方が?」

だとしたら目の前にいる人はかなりの大物。織田の嫡男、吉法師様……。

「そうだね。そういうことになるかな?」「し、失礼いたしました!」

やばいやばいやばい……!間違いなくやばい!!頭下げなくちゃ……。

「ああ、いいよいいよ。頭は下げなくていいよ。そういうの大嫌いなんだ。」

「え……?そうなんですか?」「ついでにその堅苦しいしゃべり方も嫌いだね。」

やっぱり、かっこいいし優しい……。

「ええの?」「いいですよ?」「さよか!それならそうさせてえなあ!」

「か、関西弁キャラとは……。」「ん?自分、どないしたん?」

「い、いえ。ところでお礼なんですが……。」

お礼かあ……。なんでもええんやろか?

「ほんなら、うちをあんたところで働かせてもらえへん?」

「働くんですか?なにかもつとこつ……。お金とか……。」

「そんなん、お金なんて使つてたらすぐになくなってまう。それならあんたところで働かせてもらう方がええと思つたんや。」

「なるほど……。分かりました。では、明日使いのものを送るの
で……。」

「ホンマか！？おおきにな。」「いえいえ、それでは……。行
きましよう、風。」

おお！最後の最後に忍びが出てきた！ホンマにいたんやなあ忍び
って……。

関西弁キャラ登場……。 (後書き)

あまりじかんが出来ないため、短い文章となってしまいました。
申し訳ありません。

やっと平穩な日が訪れた……はず。(前書き)

更新できずすみません!!呼んでくださる方は少なくとも私はその方達のために書いていきます!!!

やっと平穏な日が訪れた……はず。

あの事件の後に関西弁キャラ、羽柴秀吉をお世話がかりにして何年か。正確な年数も忘れてしまった。家康ちゃんは、これからが頑張りどころで気合を入れてるようだ。

この情報も忍びの風によるものだ。実に優秀で各地の情報を逐一届けてくれる。

「この情報は一体どうやって手に入れてるんですか？」

「仲間からの情報。我々、風魔党の忍びは互いに情報交換することが当たり前。」

「そういえば、お役目放棄して僕のほうに来ちゃって大丈夫なの？」

「随分昔の話をしますね……。問題ありません。我々は互いの仕事には感知しないと決めていますから。」

案外、自由な組織っていうのもいいな……。まあ、今僕の家じやそうも言ってもらえないみたい。

先日、斎藤道三氏との会合が行なわれることが決まったらしい。

嫡子、嫡男としてその会合に出席するらしい。最近の城下町の発展や、数々のアイデアに父親が花を伸ばしているだけなのである。

自分としては出席したくないところですが。そもそも言ってられず、数日後と決められてしまいました。

「僕の平和な日々はいつ来るのだろう……。」「きっと、永遠に来ませんな。」

「ういゝつす！信長。おるか？」

あ、言い忘れました。僕は晴れて織田信長になりました。

「こら！しゃべり方を控えんか！」

とすっかりおっちゃんになってしまった平出さん。

「うっさいな、おっちゃん！信長がいい言つとるんやからええやろ！」

「お、おっちゃんだと……。」「

「せや、おっちゃんにおっちゃんについて何が悪いん？」

しかも、未婚。

「信長様まで……。」「口から出ておりますよ、主。」「え？ホント？」

どんまいです。

「まあ、これからいい出会いがありますよ。」

そんなこんなで、まだ戦の無い平穏な日々が続いております。

直に、このころに戻りたいと思うときが来るでしょう。だから、
今は精一杯……

「街に出かけましょうか！」

やっと平穩な日が訪れた……はず。(後書き)

時間が無くてこれが精一杯です。

次からは本格的な戦国時代に入っていきます。

蛇との会談（前書き）

皆様に読んでいただけるように頑張っているのですが、どうにも伸びません……。そんな作品ですが、どうぞ。

蛇との会談

遂に会談当日……

「うまく和睦ができたらいいけどなあ……。」「主なら問題ないでしょう。」「

ありがとう、風。君はいい従者だ……。

「しかし、相手はママシの道三です。憑き物もママシとか……。

君が教育係じゃないほうがよかったかも……。

「なんやねん、おっちゃん。せつかく風が慰めたのに意味ないやん!」「

さすが関西弁キャラ。突っ込みは一流だね。

「そうです。私がせつかく場の雰囲気と和ませようとしていたのに……。」「

「まあ、いいじゃないですか。」「良いわけないですよ、油断しないでください!」「

「また余計なところをつっこむ、それだからアカンねん。おっちゃん。」「

「おっちゃんおっちゃんってさつきから……」「なんやねん！
やるか！！？」

一番心配なのは君たちが妙に騒がしいことだよ。

「はいはいはいはい。分かった分かった。そろそろ着くから静
かにして」

互いにいがみ合って黙る二人に苦笑いした後、目的地の正徳寺
についた。

「風は天井裏で待機。二人はうるさいから外で待ってて。」

「な！あいつはともかく私は！！」「命の恩人にあいつとかい
わな〜い。行くよ。」

中に入ると、大きな観音様が座っておりかすかな火が反射して
いる。

「やっときたか、織田の小僧。」

「もう、着いていらっしやいましたか……。申し訳ありません。

「

「女子は待たせるものではないぞ？小僧。」「重ねて申し訳あ

りません。」

やっぱりあの二人連れてこなくてよかった……。と胸をなでおろす。

「して、お前の父上はまだか？親子そろって人を待たせるのが好きだな？」

このくらいの挑発、覚悟していたけどね。やはり暗い。互いに顔が見えない状態……。

しかし、声から三十過ぎの女性のようだ。

「父上は只今天狗となり、天高く飛んでおります。いつ落ちるやも知れぬと忠告しているのですが……。」

「ほほう、自らの父を天狗と罵るか？」「罵ってなどおりません。」

「父上が天狗にならなければ今頃、謀反のにおいすらあったでしょう。」

それほどに厳しい。尾張にはいくつもの織田家がある。いつ、そちらへ寝返つてもおかしくは無い。だが、近年の僕の活躍により、家臣たちは離れたりはしない。そして、その活躍を自慢すると言う方法で、周りのものに今はこちらにつけといっているのだ。

「小僧の父が天狗ならささしずめお主は……」「風ですかね。」「…

…なぜだ？」

「風とはいつ、風向きが変わるか分からない。背中を押してく
れる風も時には正面から行く手を阻む風となりましょう。」

これは、和睦を結ぶ際に注意を述べているつもりだけど……。

「フッフ、ハハハハ！！面白いな、小僧。名を申せ。」「織
田上総介信長と申します。」

すると、あちら側から灯のあたるところへ進んで出てきた。

妖美な雰囲気を身に包んでいた。それに、背後にはマムシの憑
き物がうかんでいた。

手には杯。そして、酒。

互いに杯に酒を入れて腕を組んで飲み交わす。これは、対等の
相手として相手を認める儀式らしい。さすがのマムシも毒などは入
れなかったようだ。

「本題に入りましょうか……」「うむ……」

長い長い時間の末、和睦が結ばれた。だが、いつか敵対すると

きが来る。それもあの人が死んだ後に……。

「では、私は失礼します。最後に一つ、謀反などに注意してください。何かあったら遠慮なく頼ってください。」

「そうさせてもらうよ。小僧。」

名前教えたのに結局は小僧のままか……。

……

「んで、成功したん？」 「うん、中々油断でき無かったけど……。」

「どんな人やった？」 「綺麗な人だったよ。でも、綺麗なもののほどトゲがあるってね。」

あの人の場合むしろ毒かな……？

「そうか。綺麗な人やったか……。みてみたかったなあ。」

蛇との会談（後書き）

婚約決定。相手はもちろんあの方。

というわけで、乱世も近づいてきつつも平和な？日々を送っている主人公達でしたが、婚約が決まり、家内は怪しい雰囲気……？

近代化日記・雑賀衆について(前書き)

なかなか更新が出来ませんが……どうかよろしくお願いします。

近代化日記・雑賀衆について

前回話したとおり、婚約が決まった。

僕の記憶の中ではもう数年すると戦が起きる。もう具体的な感覚はないのだが……。

その前にやっておきたいことが多々あります。

まだ全然先の話ですが、外国船の登場です。全然先の話でも、この世界では年代がずれていたり、前世とは全く違うところがあります。例えば、武将が女性だとか……。

コホン！とにかく僕がしたいことは外国の勢力が日本に進出するを防ぐ……。

つまり、軍事の強化、近代化です。

現代最強の兵器といえば核兵器ですが……。そんなもの手に入るわけありません。

銃ですね。この時代では火縄銃。まだポルトガルの船はきてないようですが……。。

コホン！え、この日本には外国には存在しない邪術、陰陽術などがあります。

誰にも真似されないようなもの……。独特な銃が必要なのです。その第一歩として……

傭兵集団雑賀衆に相談というかあることを頼みにいきます。

なぜ、雑賀衆かというと……

雑賀衆は傭兵をして金を稼いでいるという印象が強いが、実はそうではない。

たしかに傭兵はしっかりとやっている。だが、それだけでは雑賀衆全員をとてまかなえない。

よって、塩、米などをしっかりと作り、独自の航路を使い売りさばくのです。

その独自の航路に興味があります。噂ではポルトガルと交易をする島国とつながっているとか……。

要はその航路を使い、銃を手に入れたいのです。そして、あわよくば同盟などもちやっかり結んだりしちやいたいのです。

そのためにはまず、雑賀衆の居場所を突き止めなければなりません。が案外簡単にいきました。

理由は僕が敷いた条例、いわば法律ですね。城下町では織田信

長さんに習って

樂市・樂座をやらせていただきました。

これにより町は自由な売買により雑賀衆から来る方もいらっしやる。

もちろん、自由とは言っても人間として常識的なところはしっかりやっている。

人身売買をやるうとする輩がやっぱりいたんだよね。即刻死刑に……してやりたかったけど

条件をつけて許してあげた。まあ、行商人として各地を渡り歩き、たまに忍びを送って報告を聞くだけなんだけどね……。

中々の働きぶりで最近は改心して女房も作り、子供ももつじき生まれるとか……。

話を戻しますね……。

雑賀衆かどうか見分ける点については簡単です。そばかすです。なぜだかそばかすが皆ついているんです。可愛らしく。あ、はい。雑賀衆は男と女が七対三らしいです。もちろん三が男……。

なぜかは分からないそうです。

あとは返事まちなんですよね〜。というわけで近代化第一歩の日記はこれで終わりです。

近代化日記・雑賀衆について（後書き）

一応……番外編のつもりで書きました。感想などジャンジャンくだ
さい……！

魔王たる所以 前編（前書き）

久々の更新。読んでくださる方もいらっしゃるのので受験をほっぽっています。

そろそろ、物語のメインに入るところです。

魔王たる所以 前編

最近、領内で不法な取引や人身売買など急激に増えてきた。

これも政策の影響のひとつ

ということでもそろそろ例の計画を発動しようと思う。

「それで、機動隊の配備を開始します」

今までこのために鍛えてきた兵隊たちはようやくか、と歓喜の声をあげる。

「はいはい、静かに」

そして、間を一つ置いて

「元々考えていたことだから準備は万全。一週間後には本格的に動かしていく」

「ここで選手交代、人事については平出さん&秀吉の凸凹コンビに任せておいた。

「……………え、それに加え、各隊には最低一人、忍びを入れることになっている」

これは風の案。最低一人でも入れておけば最悪の場合などに対応するため。

「それでは、今日は解散。みんな後日の活動の為体を休めておく事」

「ハッ！！」

ぞろぞろと皆思い思いの言葉を口にしながら立ち去る。信用できる家臣を残して……

「次に、隠密隊」

驚くぐらいの速さでシュババ！！と忍びが集まる。

風の鍛えた忍び達は元々親がない。肉親がない。身内がない。秘密を漏らす心配がない。

との事。

なんとというか、やりきれない思いでいっぱいだ……。

「はあ」

思わず吐息が漏れてしまった。そこにフツと風が現れた。

「主、今思っていることをこの者たちに……。忍びとはただ忠誠心のみによって動いています」

忠誠心を与えるということなのだろうか……

うーむ、あまり繕ったものとかはいえないからなあ。

「僕は皆が考えるような人ではないかもしれない。それでも「人」だ。そして皆も忍びであり、それ以前に「人」だ。厳しい教えをされたかもしれない。心を持つとも言われたかもしれない……」

一つ、間を置いて深呼吸……

「それでも、誰かが死んでしまったときには悲しいと思える心を持つてほしい。痛いと思つたら苦しむ心を持つてほしい。楽しいことがあつたら笑つてほしい。嬉しい事があつたら喜んでほしい。」

「その感情を皆で分けてほしい。悲しいことを皆で分け合えば1・1になる。楽しいことを分け合えば1×1になる」

だから、と言おうとしたところで辺りから笑いがあふれる……

「アハハハ！」「」

「え？な、何これ何これ！！？」

「主、そんな鍛え方や教えはしていません……」

あらら、そうなのか……てつきりそんな厳しい事をしているの

かと……

「え、僕の恥ずかしい発言は置いて……。皆には世話になると思う、不甲斐ない僕をどうか支えてください。民なくして国ならず、働くものなくして王立たず……とね」

「だから皆、僕に仕えてくれ」

「『承知』」

膝をつき頭をたれる。これでよかったかな……

「さて、皆の心が決まったところで所属を言い渡す。まず……」

これで、この領地は安泰だ……

魔王たる所以 前編（後書き）

まだ前編なので本命のストーリーには触れていません。
誤字などがあったら教えてください。
また、アドバイスなども待っています。

魔王たる所以 中編（前書き）

三部作に分けてお送りします。中編です……

魔王たる所以 中編

機動隊の設置・取り締まりが始まってから大体二週間くらい。

隠密隊が情報を収集、それを通達し、機動隊が取り締まる。

効果は絶大であり、不法取引がでるわでるわ……。ついでに機動隊・警邏部も設置し治安も良くなってくる。そうになると、自然とこちらの仕事が増えていく……。

「次はこの書類です」「あ、ありがとう」

「こちらにも……」「……うん、うん」

どたばたと忙しく動き回る中で一番初めに根を上げることになったのは……

「あー！もう、やってられんわ……」

その場に倒れこむ秀吉のようだ……

「しっかりとしてくれ……後、山二つくらいあるんだから」

もはや機械の様に手を動かすしかないこの状態……。疲れる。

「全く、少しは信長様を見習え」「うるさいなあ」

もう、グダグダである……とはいえ……これはきつい

「同じような書類をこつ何度も何度もやらなあかんのや……」

一人が愚痴ると次々にやる気をなくすものが増えてくる……。

「……よし！それじゃこつしよつ……。この仕事が終わったらとびきり美味しい飯屋に行って皆で打ち上げをしよう！……」

「うちあげ？」

そうか、この時代にはこの言葉はないのか……

「打ち上げというのは仕事などを終えたときに皆でパーツとやることなんだ」

それならば、と次々に筆の速度を上げていくものが出てきた。

「よっしゃあ！！それならやつたるで〜！……」

ゆっくり筆を持ったかと思いきや目にも留まらぬ速さで片付けていく……

苦笑いをおくろつ……。

「あはは……さて、こつちもやりますか……」

カランカラン……と背後で物音がする。どつやら何か連絡があるらしい。

背後の壁には仕掛けがあり、一回叩くと木板が外れる仕組みなっている。

「さてさて、風からの連絡は……と」

『最近、斉藤道三の息子に怪しい動きあり……』

一枚目は頼んでおいたこと。確かあの人は謀反で死んだんだから。

『最近、各地の村にて妖魔による殺人。しかし、傷跡はなく病の類ではない。奇跡的に助かったものによると、確かに刀で切られたらしい。だが、やはり刀傷はない。相手は女性の姿をしている模様』

これは……やっと動き出したみたい。引き続き調査してもらえよう『赤札』で返しておこう。

そして、早期な解決をしよう。

三枚目……

『現松平党首は問題なく、政を行っている。彼女の背後に常に『本多忠勝』や己が獲得した忠臣により、今のところ謀反などの心配はない様子』

これはすごく心配していたことなのだけれども……問題ないよっだ……。

今解決しなければならぬことは二つ。謀反と妖魔……。妖魔のほうを先に解決しておこう。これでは民が安心して暮

らせないからな……。

「よおし！終わったた~~~~~！！！！！」

早ッ！！？（。°*）

まあ、終わったようだし……

「それじゃ、皆でご飯に行こうか？」

喜びの顔を見せ、ともに笑いあう。こんな日が続けばいいのに……。

飯屋を貸切、大いに騒いだ。酒を飲ませあったり、飯を食べたり……まあ、楽しかったよ。

「おら〜！もっと飲め飲め〜！！」「ひ、秀吉、これ以上は

……」

「ウチの酒が飲めんゆうんか！？ゆるさんで〜！？?」「ウグ

ッ……！〜くぼくぼ

そう、ちょうど平手さんが溺死しそうなくらい……。こんな感じだよ……。

「御代はつけといてね、僕は仕事があるから……」「え〜！？

「文句言わずに、飲んでて……いいね？」「まかときい！たつぷり飲んだるで〜！！！」

うらうら〜、と他の人たちも巻き込んでいく……

「風」「フツツ」……」

「隠密隊春夏秋冬を……」「承知」

フツと消えたり現れたり、忍びつて大変だな……。まあいいや。

ふらふらと目的地へ向かう……

魔王たる所以 中編（後書き）

まだまだ触れていないようなところもありますね……。
まあブランクから立ち直れるようがんばります。（・・・）

魔王たる所以 後編（前書き）

今回はいろいろな分岐があったので作者としても悩んだのですが、
ようやくまとまったので、書きます。

少々、長くなります。

魔王たる所以 中編の最後の部分を編集しました。読んでおかないと話が少々分かりませんのでお手数ですが、先にそちらのほうを
願います。

魔王たる所以 後編

さてさて、夜道を移動中の僕。織田信長です。ちなみに前世の名前は鏡見蒼弥。

かがみ そうやと申します。

え？なんで今？それは作者が長らく考えた末にようやく思いついてうきうきして早く伝えたいということ、関係のない今に名前を出す。という暴挙に出たんです。

コホン！まあ、いいと思います。

ええ、と。ここで注意ですが……前回の編集したお話は見ていただけましたか？ここからの話は読んでいないとご理解いただけませんが……。

隠密隊春夏秋冬についての説明を長い道のりの中で紹介させていただきます。

隠密隊の中で最も優秀な忍びを、最も重要な任務を……。ということとでさまざまテストを行った結果。クリアできたのが四人。何かいい名前は無いか？ということとで季節の変わり目ということもあり、春、夏、秋、冬という名前をそれぞれ四人に授け春夏秋冬という名前にさせていただきました。

山道に行くこと一刻、そのものたちはようやくやってきたようです。

「いつまで隠れてるんですか？出てきてください。秋と冬もいつまで化けているつもりですか？」

「ん〜、やっぱりバレちゃった〜」「これで二十戦二十連敗ツス」

茂みから現れる二人の少女と……

「やはり、敵いません。さすがは「……信長、なぜ分かった？」人の話を……」

野うさぎと狐に化けていた二人。話を途中でさえぎる冬……。

「なぜ……といわれても」「また、やってるのですか？主」

何をやっているかというと、最初の頃見破ったとき、彼女たちは完璧に隠れていたのに〜と悔しくてたまらず、それから毎回こうやって勝負？が繰り広げられたりしている。

「主は自然から何かを読み取るのが得意なようですからなあ……」

「まあ、そうだね。自然の力を読み取るのが犬神流の一つでもあったり……あと、老人みたいなしゃべり方だよ？」

犬神流が主に斬る相手、『生氣』生きていくためには必要不可欠なものである。

これを切り裂くことで相手の生気の通り道切り裂く、又は生気そのものを露散させることで相手を行動不能にする。又は殺す……。

犬神流剣術の極意は鋭き爪で魂を刻み、猛々しい牙で生気を喰らう。

喰らうといっても、一向にお腹は一杯にならないけどね。刀に生気が乗るだけで、しばらくすると消える。そしてそれをするには生気の『流れ』を見破らなければならない。これは忍びであろうとごまかすことはできない。だからこそ見破れたというもの……。

禁忌・九十九つくもを教えてくださいれば良かったけど、継承する前に殺されてしまったから……

「む……確かに私は歳は主よりも上ですが……」

「そうだね。まだまだ可愛いつていうレベルだと思うよ？」

「れ、れべる？とは何か分かりませんが……」

「さて、目的地のところに着いたけど……。これはひどいね……」

山中にある小さな村。ここは二日前から連絡が取れないらしい。もしかしたらと思い、ここに出向いたけど正解だったようだ。

「報告と食い違います。見たところ村のものたちは皆傷つけられた後があります」

「ん〜？よく見て、死体は噛み傷が多いね。つまりは……」

「何者かが食い漁った、ということツスか？」

「そうだね〜、ここは瘴気も濃いし。妖魔が多いのかも〜」

あ〜、フラグたちました。戦闘フラグです……。

「そういう事いうと、妖魔が……」

「グルルル！！」「ギャウギャウ！！」「キーキー！！」

あらら〜、いわんこつちやない……。

「妖魔ですね、主」「フウ……。仕方ないね……。戦闘準備」

犬型が5、鳥型10、小動物型15……。全部五の倍数とか……。

刀に手をかけ手順よく抜いていく……。刃の裏側に指を乗せて滑らせていく……。

「犬神流剣術継承者……鏡見蒼弥。いざ、猛々しく、いただきます」

脇の構えを取り、駆け出す。

合図のように周りの五人が走り出す。

春は呪符、夏は鎖鎌、秋は棍、冬は武装籠手……まあナツクル

のようなもの。

風はあいも変わらず双小刀を使っている。

「疾ッ！」

刀を下から薙ぎ上げる犬型の胴体を捕らえ、生気を切り捨てる。

そのまま後ろ足に力を入れ振り向き様に切り下げ、鳥型を真つ二つ……。

一度生気を払い、次の標的に備える。

春は結界を展開し、突っ込んできた小動物二体を燃やす。罨型の呪符を空中にセット、五枚のうち二枚が相手に引つかかる。

夏は犬型の首に鎖を投げ、巻きつけた後に鞭のように力を入れ、相手を中に浮かせる。

跳躍、後に鳥型を踏みつけ様に鎌で切り裂き、跳躍。そして身動きが取れない犬型に鎖を引き、鎌で胴体を一閃……。

秋のターン！棍を振り下げ、頭蓋を貫き地面にたて棍を軸にして、棍と共に真上に跳躍。挟み撃ちにしようとした二体の犬型をピツタリにタイミングを合わせ、二体の頭蓋骨を砕き、二体追加。

棍には団子三兄弟のような犬型三兄弟ができた……。

冬は、すばしっこく動き回る小動物が攻撃してくるまでただ瞳を閉じる。

三体が狙ったのを察知し、回し蹴りで二体を排除。残りの敵は

三体……。

「……………めんどくさい……………。奥技・旋蹴せんしゅう」

地に手を着き、右手を軸にして回転。旋風を起こし相手をひきつけ、蹴りを逆に回して、排除。

「後、鳥六体。小動物八体……か」

「主は下がってくだされ、いざ、参りますぞ?」

木の葉が舞い、風が横を掠めていく。低い姿勢のまま小動物をとてつもない速さで斬りつけていく

あー、可愛そうな小動物。全部バラバラだ……。

「刺糸・引」

糸が鳥型に絡みつき、糸を引けばブツリ……と音を出し、これもバラバラ……。

「これで全部。にしても、妖魔の動きがおかしかったね……」

「え〜?そうツスか?」「夏は馬鹿だから分からないのよ」

「……………妙に組織的な動きをしていた」

「That's Right!!その通り」

「誰かに操れら手いるのかも知れません。気をつけましょう」

不意にズウンと瘴気が濃くなった……。

「ぐ!? 重いよ、何この瘴気……」 「親玉の登場ツスカ!?!」

「汝らか? 我が操る手下を破ったのは?」

「始めまして、鏡見蒼弥と言えば分かりますか? 第六天魔王」

「ほう、汝が天使のおつかいというわけか。我を連れ戻しに来たのか?」

確かに女性の声だが、低く声が腹の底まで響く、耳に残る。

「おつかい? 違いますよ……。僕は貴方を従えに来たんです」

「我の力を欲するか? フツツ、よかろう。汝の刀と我が剣は良く似ている」

「風、下がって。春夏秋冬、四季結界」

「~~~~~」
「~~~~~」
「~~~~~」

風は下がり、春、夏、秋、冬はそれぞれ呪文を唱え結界を展開する。

「これで、僕らだけだ」「正々堂々と……というわけか?」

「こんな姿誰にも見せたくないから……。だからだ……」

この結果の中は誰も覗くことはできない。だからこそできるともある。

「これは禁止されてるし僕自身嫌いなんだよ。禁忌・十二」

羽織を脱ぎ捨て、憑依状態に入る。

「聞いたことがある。汝、犬神流継承者が……。その身に流れる犬神の力を呼び覚ますか……」

「ハッ！構えろよ、ギッタギタに食い散らかしてやるよ!？」

「なるほど、醜いな……。では行くとするか」

真つ赤な刀身をもつ刀を引き抜き、鞘を抜き捨てる相手……。

「殺！禁忌・秘伝・秘技・絶抹殺剣!!!」

刀と刀がぶつかりあうというレベルの音ではない、衝突する、鼓膜を押さえたくなる音が響く。

「手が痺れる……。なんという馬鹿力よのうしかし、力に頼るのはよろしくない……」

「そうさツ!!その為に……。僕がいる」

「なんと!!!？」

魔王の隙をついたかと思われる攻撃は見透かされており、かわ

されてしまった。

「犬神の力を操れねば、継承者にはなりえませんか……?」

「甘く見ておったようだ」

「ふう、なんかもう疲れますね」「気が合うのう?」

「「一撃できめましょう」(るかのう)」「」

二人同時に駆け出し、同時に振りかざす。

刹那……空間は崩れ、結界はとかれた……。

魔王たる所以 後編（後書き）

どうなったかは次話で語りたいと思います。
長くなってしまったことをお詫びします。

魔王との決着（前書き）

おお、更新が遅れてしまい申し訳ありません。
テストが忙しかったもので……w

魔王との決着

『戦いで勝ったからといって油断してはいけません。本当の戦いはその後です……』

なるほど……。こういうことだったのか……。

灼熱のマグマが吹き上げる火山の真上に広がっている見えない床……

恐らく、ここは第六天魔王の精神世界。

早期決着でケリをつけたのが正解だった……。

「中々やるじゃない？私をここまで追い詰めるなんて……」

「誰ですか？」「何を言ってるの……、さっきまで戦っていたじゃない」

「……第六天さん？」「当たり前じゃない」

いやいやいやいや……、性格変わりすぎでしょ……。
え、もう呆然とするしか……

「いや、あの鎧着てると……あんなしゃべり方しか出来なく

て困るわ」

「そんな能力が？」「ええ、衝撃を緩和してくれるし……。貴方の攻撃……」

妖艶な笑みを浮かべてささやくように言う……

「……これがなかったら、死んでたわ？」

思わず、身震いしてしまった。寒気が背中を走りましたよ……？

「さて、決着をつけましょう？」「ええ、そうですね……」

「」「話し合いで……！」「」

おお、見事なシンクロ……。もう契約成立でいいじゃないですか？

「ふふ、常々気が合うわね。でも、王としての覚悟は聞かないとね……」

「覚悟……ですか？」

「人の上に立つのだからそのくらいの覚悟はしているんですよ？」

「言葉にすると難しいですね……」

「大切な人を守る……その為に貴方は家族を殺せる？」

「……ふむ、その可能性すら潰す」「回避できない運命だったら？」

大きく息を吸い、自信満々に言葉を吐き出す。

「運命と偶然は紙一重……。運命を偶然に変え、回避してみせる」

「自分を差し出せといわれたら？」

「それは出来ない。この命は……僕一人だけの物ではない」

この世界で、介入されることなどなければ普通に生きている

織田信長

介入したことによる、信長という一人の魂の消去

「僕一人の命で助かるという可能性すらも潰す」

「可能性を潰す……ね、嫌いじゃない表現よ……」

それだけじゃあ……ね？と、彼女は言った

「望みですか？何が望みなんですか？」

「大天使に天に戻すよう頼んでくれない？」

「それだけ？」 「ええ」

てつきり、魔王だから世界をくれなんて言うのかと思った……。
というのは黙っておこう。

「汝、我が剣となれ」「汝、我が憑代となれ」

「我ら、互いの承認を持ってここに契約を成す」

第六天が体の中に吸収されていく。

胸に手をあて、話しかける。

「これからよろしく……」

魔王との決着（後書き）

すみません、時間があればもう少しまともにかけたのですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8026m/>

第六天魔王の真実

2011年1月31日05時03分発行